

子規全集

第二卷

俳句二



N. D. C. 910 704 p 20 cm

子規全集 第二卷

俳句二

定價 參阡六百圓

昭和五十年六月十八日 第一刷發行

著者 正岡子規

編集代表 正岡忠三郎

發行者 野間省一

發行人 株式會社 講談社

東京都文京區音羽二―一二―二一

電話 東京(〇三)九四五―一二―二一(大代表)

郵便番號 一一二 振替 東京三九三〇

印刷所 株式會社 精興社

製本所 大製株式會社

©正岡忠三郎 一九七五年

落丁本・亂丁本はお取りかえいたします

俳句 二

② 463	② 420	② 417 注	② 401	② 395	② 377	② 375	② 353	② 350	② 339	② 333	② 333	② 289	② 287	② 283	② 259	② 233	② 126	② 104	② 101	② 74	② 45	② 29 注	② 26
2	14	8	13	8	7	14	1	2	13	4	2	10	8	12	3	3	3	12	11	10	15	2	11

〔珠・
歌・
原〕

小日本 27・4・28 「運門教會」春暮れて 20〔脚注入ル〕

小日本 27・3・7 「水戸弘道館」二・1

小日本 27・6・27〔脚注入ル〕

古能美知 31・9・25〔脚注追加〕

静岡民友新聞 30・11・30〔脚注入ル〕

古能美知 31・9・25〔脚注追加〕

古能美知 31・11・30「神祇七首」1〔脚注〕〔前行の脚注より移入ル〕

早稲田文學 29・2・15「橘百句の内」十二・6百合の花〔脚注入ル〕

古能美知 31・10・25「小萩集」〔脚注追加〕

古能美知 31・10・25「小萩集」〔脚注追加〕

日本 31・10・11〔脚注入ル〕

海南新聞 28・10・6 菊の香や——〔脚注追加〕

日本 31・10・26 十兩を——〔脚注入ル〕

古能美知 31・11・30「神祇七首」3〔脚注追加〕

古能美知 31・11・30「神祇七首」6〔脚注入ル〕

古能美知 31・12・25 くらき闇の——頭巾か

古能美知 31・12・25〔脚注追加〕

古能美知 31・12・25〔脚注追加〕

古能美知 31・12・25〔脚注追加〕

「初鵜」桐の舎〔脚注追加〕

静岡民友新聞 32・3・17〔脚注追加〕

29・3・1

國民之友 30・3・13〔脚注追加〕

静岡民友新聞 31・5・20〔脚注入ル〕

1「二百十日」〔脚注

神祇七首〕4〔脚注

神祇七首〕2〔脚注

神祇七首〕5〔脚注

神祇七首〕5〔脚注

神祇七首〕5〔脚注

神祇七首〕5〔脚注

神祇七首〕5〔脚注

神祇七首〕5〔脚注

神祇七首〕5〔脚注

神祇七首〕5〔脚注

神祇七首〕5〔脚注

神祇七首〕5〔脚注

神祇七首〕5〔脚注

神祇七首〕5〔脚注

神祇七首〕5〔脚注

神祇七首〕5〔脚注

神祇七首〕5〔脚注

神祇七首〕5〔脚注

神祇七首〕5〔脚注

神祇七首〕5〔脚注

神祇七首〕5〔脚注

神祇七首〕5〔脚注

神祇七首〕5〔脚注

神祇七首〕5〔脚注

神祇七首〕5〔脚注

神祇七首〕5〔脚注

「小川かき
消す」〔脚注追加〕

15の日付下に

目次

寒山落木	明治二十七年	三
寒山落木	明治二十八年	四
寒山落木	明治二十九年	五
抹消句	自明治二十七年 至明治二十九年	六七
參考資料		六四
解題	和田茂樹	六五
解說	寺田透	六八

編注

子規は明治十八年から自作の俳句を半紙二折綴りに編年體で分類淨書しはじめ、これを『寒山落木』と名づけた。本全集では自筆本『寒山落木』（國立國會圖書館藏）を底本とし、そのうち本巻には明治二十七年、二十九年の分を「抹消句」をも含めて翻刻收録した。なお、この期間の未載録句は本全集『俳句三』巻末に一括して掲げた。

脚注について

一 脚注は、初出の雑誌・新聞、および選句集名をその刊行年月日順に記載した。

一 俳句の下の算用數字は、抹消句の位置を示し、且つ巻末の抹消句番號と對應する。なお、數字が季題の下に位置にある場合は、その季題の最初の句が抹消されたことを示す。

一 脚注の略記號その他については次の通りである。

例 日本 29・9・1「山」二十・10 春

ほとゝぎす 30・7・30『試問』——夫婦哉

同 『同』

初出誌又は新聞紙名 發行（明治）年月日 「句題」又は「前書」句數（例・二十句中の第10句を示す）『』は、隨筆・紀行等の文題。掲載誌紙の異同は上五 中七 下五 の内、異同個所のみ表記した。但し、哉↑かな 時鳥↓子規 等の同音異字の場合は注記しなかった。

同↓初出誌紙、掲載年月日が前句と同一の場合。

「同」「同」↓「」「」内の前書・文題等が前句と同一の場合。

葉↓二葉集・明治二十七年五月刊

増補 再版 獺祭書屋俳話附録（選句集）・明治二十八年九月刊

新↓新俳句・明治三十一年三月刊

春↓春夏秋冬・明治三十四年五月、明治三十六年一月刊

雑誌ほとゝぎすは便宜上、松山版（明治卅年一月、明治卅一年八月迄）は、ほとゝぎす、東京版（明治卅一年十月以後）は、ホトトギス、と表記した。

一 雑誌新聞等で、のちに「正誤」のあった句・前書については訂正字句に従った。（「」は編者の注。）

寒山落木

明治廿七年

三

明治二十七年甲午年

子規子未定稿

新年 紀元二千五百五十四年なり

ほのく^ゝと茜の中や今朝の不二
禪僧の寂然として今朝の春
白し青し相生の筑波けさの春
春や來る表に物も案内も
百卷の古書の山こえ春は來ぬ
父母います人たれくそ花の春
盆栽の紅梅さくや女御の春
猫の子の眷族ふゑて玉の春

新年

淋しさの尊とさまさる神の春
君が春さゝれ石原玉かしは

蓬萊

三寶に東海南山庵の春

草庵

掃溜にこれはくの春も來し

新聞記者となりし身の元日より筆をとり
そめて覺束なくも

むつかしき言の葉草や花の春

根岸

元日

鶯の隣にすんで今朝の春
灯を消して元日と申庵哉
うつくしや洛陽の元日雪ちらく

元日の雀鳴くなり手水鉢

元日や二十六年同じこと

4 5

日本人 29・1・5 『新年二十九度』

6

7

初 初 立 正 松
日 空 春 月 の内

元日や何やら語る鶴四五羽
元日の芳野に花もなかりけり
元日や都の宿の置巨燧
元日を御濠の鷗とも知らず
元日の住吉淋し松の音
元旦に追つかれけり破衾
元日の夕日になれば哀れ也

太神宮

元日もたゞ尊とさの涙かな
裏門や遣羽子はやる松の内
琴鼓ならべかけたる陸月哉
春立つや晝の灯暗き山やしろ
初み空去年の眼を開きけり
初空へつゝとのべけり鶴の首
鴉一羽初日の中を通りけり

14 13

12

11

10

9

8

初 鴉 初鴉不二か筑波かそれかあらぬ 古妻のいきたなしとや初鴉 16 15	初 雞 田 舍 初雞の枕の上にうたひける 樋の口や東風吹渡る鰯の顔 女つれて東風に吹かれに東山 馬の耳立てゝ東風吹くあした哉 18 17	飾 り ふじのねや麓は三保の松飾り めでたさや飴りの蜜柑盗まれて 20 19	蓬 萊 明家や門松の齒抜面白き 蓬萊に橙の朝日昇りけり 蓬萊や南山の蜜柑東海の鰻 21	蓬 萊 蓬萊の山も動かぬ代なりけり 幽朶の羽蓬萊鶴の如くなり 大内は蓬萊山の姿かな
--	---	---	--	--

日本 28・1・1 「新年雜興・田舍」

日本人 29・1・5 「新年二十九度」

日本 28・1・1 「新年雜興・皇居」 新

丹靖老に寄す

蓬萊に似たり小窓の松の山

飄亭の故郷に在るに寄す

君か家は蓬萊橋をかざし哉

福菓 福菓に雀の下りる日向かな

串柿 父母妻子串柿のごと並びけり

四方拜 四方拜其時朝日のぼりつゝ

禮者 輪かざりに標札探る禮者かな

雜煮 旅人の雜煮喰ふたる鞠子哉

三碗の雜煮喰ひぬ小傾城

七碗の雜煮くひけり梅の花

大磯

膳の上に繪の嶋のせて雜煮哉

屠蘇 屠蘇かけて見ばや枯木の梅の枝

田作り 田つくりや庵の肴も海のもの

22

23

24

25

26

27

28

日本
27・1・3
獺

日本人
29・1・5
『新年二十九度』

初	舟	馬		着	書	弓	謠	初	初		嫁	野
夢	乗	乗		衣	初	始	初	曆	荷		か	老
は	乗	乗	紙	始	年	や	草	人	牛	嫁	さ	海
つ	そ	そ	衣	名	玉	せ	の	の	引	か	ゝ	老
夢	め	め	あ	所	や	腕	戸	手	の	君	や	野
や	や	の	り	や	上	や	や	に	初	の	く	老
吉	恵	足	参	絹	の	三	雑	は	荷	通	は	草
野	方	も	り	商	一	千	煮	や	の	ひ	誰	庵
龍	参	亂	の	人	字	石	の	古	山	路	そ	の
田	り	れ	渡	の	を	の	腹	り	よ	多	小	ある
の	の	ず	し	着	筆	弓	の	そ	人	し	殿	じ
花	舟	雪	と	衣	は	始	謠	め	の	破	原	愚
盛		の		始	じ		初	初	波	障	嫁	老
		あ			め		曆		子	か	か	とい
		と								君	君	ふ

萬	鳥	猿	傀儡師	手		遺羽子	若餅	齒固
歳	追	曳	師	鞠		子	餅	固
萬	鳥	猿	傀儡師	目	神國の女を	遣羽子	若餅	齒固
歳	追	引	梅の花道	の黒い人に		や皆君が	や草津の	やいで海のもの
に見つけられけり	のあとから笑ふ	のきよろつく	歩み来る	生れて手鞠哉		代の女ぶり	里の姥が軒	の山のもの
草の庵	雀かな	日本橋				品定め		
						遺羽子や京の六條數珠屋町		
						遺羽子のちらく雪となりにけり		
						遣羽子に京の男のやさしさよ		

39

38

37 36

日本 28・1・1「新年雜興・女」日本
人 29・1・5『新年二十九度・神國の女
を』——人と生れて——

日本 28・1・1「新年雜興・京都」

類聚書屋俳句帖抄上巻 35・4・15（以下
「俳句帖抄」と略す）

福 壽 草	子 の 日	齊 ^{なう} 打 つ	水 祝	万 歳
南山をかざすや窓の福壽草	小松かくれ鶴の子見ゆる子日哉	引かんとや小松かくれの緋の袴	春日野の子の日にしたり六歌仙	君か代の齊をはやす拍子哉
	嫁つれて鼠も出たり水祝ひ	大君の來ませ御肴水祝ひ	万歳や四條をもどる夕日影	

44

43

42

41

40

俳句帖抄